

異世界の古代墓地の墓  
守として転生した元声  
優の  $\Omega$  が死霊術師  $\alpha$  に  
「お前の匂いで死者す  
ら蘇りそうだ」と突然  
 $\alpha$  覚醒されて月光の下  
で番にされる話

「は……っ♡ なに、これ……っ♡」

寝台のシーツを握りしめ、ナギは自分の腹の奥から湧き上がる熱に呻いた。汗が背中を伝い、薄い寝巻きが肌に貼りつく。真夜中の管理棟、月明かりだけが石壁を白く照らしている。

さっきまで普通だった。封印区画の死霊をザインと二人で鎮め、疲れ果てて寝台に倒れ込んだところまでは覚えている。

「抑制薬は……もう……っ」

ない。三日前に最後の一錠を飲んだ。配達はまだ来ない。それでも管理棟に籠もっていれば大丈夫だと、つい数時間前にザインに言われたばかりだった。

——なのに。

「あ……あっ♡ お腹の、奥……勝手に……っ♡♡」

子宮が脈打つように収縮を繰り返している。何も入っていないのに、身体の芯が疼いて、カントから制御できないほどの蜜があふれ出す。寝台が濡れていく。太腿の内側を熱い液体がつたう感触に、ナギは唇を噛んだ。

(これは——ヒートだ)

前世では男だった。日本で声優をしていた。少年役が得意で、ファンに「天使の声」と呼ばれた。過労で死んだ。目が覚めたらこの身体だった。

男の骨格。男の声。男の外見。なのに下半身だけが——女の器官を持つΩ。

カントボーイ。この世界ではそう呼ばれる。

「嫌だ……っ♡ こんなの……俺の身体じゃ……んっ♡♡」

抑制薬で三年間押さえ込んできた。匂いを消し、βのふりをして、人と関わらない墓守の仕事を選んだ。古代墓地「灰の庭」の管理人。生者が来ない場所。来るのは死者と——  
「ナギ」

階下から、低い声が響いた。

ザインだ。

死霊術師。三ヶ月前から封印区画の研究で通い始めた男。黒髪を低く束ね、左目の下に呪術の刺青が走る長身。暗い紫の瞳。冷たい指先。感情の起伏が少なく、死者と語る方が性に合うと言っていた。

——まだβだと思い込んでいる、未覚醒のα。

「ナギ。起きているか。お前の身体に——」

石の階段を上がってくる足音。ナギの全身が総毛立った。

「来るなっ！」

叫んだ。声が裏返った。前世で鍛えた喉が、恐怖と快樂の混じった音を震わせる。

「近づく……な……っ♡ 俺、今……っ♡♡」

足音が止まった。一瞬だけ。

「……この匂いは」

ザインの声が変わった。低く、喉の奥から絞り出すような、聞いたことのない響き。

ドアが開く。

月光に照らされた寝室。汗と蜜でぐっしりの寝台。その上で身体を丸め、膝を抱えて震えているナギ。

ザインが敷居をまたいだ瞬間、空気が軋んだ。

「お前の匂いで死者すら蘇りそうだ」

その声に——ナギの膝から力が抜けた。丸めていた身体が崩れ、仰向けに倒れる。腹の奥からきゅうん♡と子宮が疼き、カントの入口がぱくぱくと収縮した。

$\alpha$  の威圧。フェロモン。嗅いだ瞬間に全身の力が抜ける、従属の本能。

「ちが……俺は  $\beta$  ……だって言った……のに……っ♡♡」

「嘘だ。お前は  $\Omega$  だ」

ザインが一步近づく。暗い紫だった瞳が——金色に染まっている。 $\alpha$  覚醒の証。

「しかも……ただの  $\Omega$  じゃない。この匂いは——」

もう一步。

ナギの身体が勝手に反応する。カントから蜜が溢れ、太腿を伝い、シーツに染みを広げていく。匂いが充満する。甘くて重い、 $\Omega$  のフェロモン。

「頼むから……忘れて……くれ……っ♡」

涙が目尻からこぼれた。

ザインの拳が震えている。覚醒したばかりの  $\alpha$  の本能を、理性で無理やり押さえ込もうとしている。額に脂汗が浮いている。

長い沈黙。

雨が降り始めた。石壁の外から、ぱらぱらと冷たい音が響いてくる。墓地の糸杉を叩く雨音。燐光がちらちらと揺れる。

ザインが外套を脱いだ。ナギの肩にかけようとする。  $\alpha$  のフェロモンでナギの匂いを覆い隠す——はずだった。

「他の  $\alpha$  が嗅ぎつける前に、隠せ」

「お……っ♡♡ お前の……外套……匂いが……もっとだめっ♡♡♡」

逆効果だった。ザインのフェロモンが染みた外套を纏った瞬間、ナギの身体がびくんっ♡と跳ねた。子宮が激しく収縮し、カントの奥から蜜がどろりと溢れる。

ザインが奥歯を噛み締めた。

「……俺が触れたらどうなるか分かっている。距離を取る。抑制薬は明日には届かせる。それまで——」

「あっ……♡ お……♡♡ ザイン……お前のフェロモン嗅いだら……身体が……勝手に……っ♡♡♡」

ナギの手が、震えながらザインの外套を掻き抱いていた。鼻先を布地に押し当てて、匂いを吸い込んでいる。理性が「やめろ」と叫んでいるのに、 $\Omega$ の本能が $\alpha$ の匂いを求めて止まらない。

「——分かった。下にいる。石壁一枚挟めば匂いは薄まる」

ザインが踵を返す。ナギは外套を抱いたまま、寝台で蹲った。

雨音が強くなる。管理棟の石壁を叩く水の音が、二人の呼吸を覆い隠した。

\* \* \*

ザインが一階に降りた後、ナギは耐えようとした。

外套を遠ざけようとした。でもそれはザインの匂いを手放すということと、手が震えて離せなかった。

「くそ……っ♡なんで……この身体は……っ♡♡」

前世では男だった。女性器なんてなかった。こんな疼きも、こんな蜜も、知らなかった。

管理棟の地下に浴場がある。汗を流せば少しは落ち着くかもしれない。ザインもそう言っていた——「匂いを完全に消すには汗を流せ」と。

石の階段を降り、一階を通過する。ザインは居間の椅子に座り、本を読んでいた。視線を合わせない。ナギも何も言わずに通り返り、地下へ降りた。

浴場は石造りの小さな部屋。湯を張り、身体を沈める。

「ん……っ♡」

湯の熱さが、過敏になった全身を刺激した。皮膚の表面が  
ぴりぴりと痺れ、乳首が湯に触れただけで硬く尖る。

（落ち着け。落ち着け俺。前世じゃ三十二まで男やってたん  
だ。こんな——）

カントが湯の中でじくじくと蜜を出している。自分の体液  
が湯に溶けていくのが分かる。子宮が収縮するたびに、くち  
ゅ、と小さな音がした。

石造りの浴場は音が響く。水音、息遣い、すべてが壁に反  
射して増幅される。

「は……っ♡ やだ……音、止まんない……っ♡♡」

抑えようとしても、カントから漏れる水音だけは止められ  
ない。ぴちゃ、ぴちゃ、と湯の中で身体が出す音が、石壁に  
反響して浴場全体に広がる。

（上にザインがいる。石壁越しに——聞こえたら——）

分かっているのに、手が下半身に伸びた。

「こんなの……嫌だ……っ♡」

指がカントの割れ目に触れる。ぬるりとした蜜の感触。前  
世の自分にはなかった器官。この身体で目覚めてから三年、  
極力触れないようにしてきた場所。

「ん……っ♡ く……っ♡♡」

クリトリスに指先が当たった瞬間、腰がびくっと跳ねた。  
充血して腫れ上がった小さな突起が、些細な刺激に過剰に反応する。

（男なのに。前世では男だったのに。こんな身体が——気持ちいいなんて——）

指が動く。くちゅ、くちゅ、と割れ目を擦る。蜜が指に絡み、湯の中で白く濁った。

「は……っ♡ あ……っ♡♡ だめ……声……出ちゃ……っ♡♡」

声を殺す。前世で声優だった喉が、こんな時にまで「制御」を発揮する。息だけで耐える。

でも水音は止められない。ぐちゅ、ぐちゅ、と自分のカントが鳴らす卑猥な音が石壁に反響した。

指を二本、中に入れた。熱くて、ぬるぬるで、きつく締まる。壁を撫でると、とろりと奥から蜜が溢れた。

「ん……っ♡♡ 奥……っ♡ 前世じゃ……こんな場所……なかった……のに……あっ♡♡♡」

子宮が指の先で脈打っている。触れたくないのに、身体が勝手に奥を求める。指では届かない。足りない。もっと深く、もっと太いものが——

（ザインの——）

思い浮かべた瞬間、カントがきゅうっ♡と締まった。



「やだ……っ♡ あの人のこと考えて……っ♡♡ 俺は男なのに……Ωのくせに男とか意味分かんない……っ♡♡♡」

指を速く動かす。ぐちゅ、ぐちゅ、と水音が大きくなる。石壁に響く。声は殺せても、この音だけは止められない。

小さな絶頂が来た。身体がびくびくと震え、カントが指を締め上げる。口を手で覆い、声を殺した。息だけが、は、は、と荒く漏れる。

——石壁の向こう。一階の居間。

ザインは本のページを繰る手を止めていた。

覚醒したばかりのαの聴覚が、微かな水音を拾っている。くちゅ、くちゅ、という、湯とは違う粘度の音。そして殺しきれなかった吐息。

拳を握る。爪が掌に食い込む。本能が「降りろ」「抱け」「番にしろ」と咆哮している。

——握った拳から血が滲んだ。

ナギが浴場から出てきた時、ザインは何事もなかったように本を読んでいた。視線を合わせない。ナギも何も言わない。

互いが何を聞き、何を感じていたか。知っている。でも口にしない。

偽りの平穏が、薄い石壁一枚の上に成り立っていた。

\* \* \*

それが崩れたのは、ナギが二階で眠りにつこうとしてから一刻も経たない頃だった。

「がっ……♡♡ なに……これ……おっ♡♡♡」

体温が一気に跳ね上がった。全身から汗が噴き出し、カントが制御不能なほどの蜜を溢れさせる。

さっきまでとは比較にならない。身体の芯から燃えるように熱い。子宮が痙攣し、何も入っていないのに収縮を繰り返す。

(薬が切れたからじゃない。これは——もっと——)

シーツを握りしめる指が白くなる。寝巻きの裾が蜜でぐっしょりと濡れている。甘くて重いΩのフェロモンが、管理棟全体に充満していく。

ザインが駆け上がってきた。

「ナギ。これは抑制薬切れの反動じゃない」

ザインの金色の目が陰しくなっている。死霊術師としての分析が声に滲む。

「封印区画の死霊を鎮めた時、古代の呪術残滓がお前の体内に入り込んでいる。残滓がΩの生殖機能を刺激して——強制発情を起こしている」

「う、そ……だろ……っ♡♡」

ナギが汗まみれの顔で見上げる。シーツの上で身体を丸め、腹を抱えている。カントから溢れた蜜が太腿を濡らし、甘い匂いが部屋を満たしている。

「このまま放置すれば発情が止まらない。最悪、身体が持たない」

「どう……すれば……っ♡♡」

「方法は二つ。一つは、俺の死霊術で直接体内から残滓を引き剥がす。だが——お前の身体に俺の魔力を通すことになる。 $\Omega$ の発情中に $\alpha$ の魔力を注ぎ込めば——」

「番の契約が成立する」

ナギの声が掠れた。

「もう一つは——」

「誰かに抱かれること。だろ」

沈黙が落ちた。雨音だけが石壁の外で響いている。

ザインが後退る。

「俺が触れば、番になる。それは——」

「やれ」

「……なに？」

ナギが腕で顔を覆った。涙声だった。

「残滓を引け。番にはするな。生殖器官に触れなければ大丈夫なんだろう。お前さっきそう言った」

「……やってみる」

ザインが寝台の縁に腰を降ろした。ナギの腹部に掌を当てる。

冷たい。死霊術師の魔力が指先から流れ込んでくる。

「ひ……っ♡♡ 冷た……っ♡ でも……奥が……っ♡♡♡」

氷と炎が混じるような感覚。ザインの魔力がナギの体内を巡る。呪術残滓を探して、血管を、神経を、内臓を、魔力が這い回る。全身を内側から撫でられているようだった。

「声、出すな。集中が切れる」

ザインの声も震えている。ナギの体内に自分の魔力を通すことで、ナギの身体の状態が全部伝わっている。体温。心拍。そして——カントの奥で脈打つ子宮の収縮まで。

「あ……っ♡ そこ……通らないで……あっ♡♡ 子宮……魔力で……撫でられ……っ♡♡♡」

ナギの腰が浮く。ザインの魔力が腹部を通過するたびに子宮が反応してびくりと跳ねる。魔力の流れが子宮壁をなぞるだけで、カントから蜜が溢れ、ぐちゅ、と音がした。

「迂回する」

「あ……っ♡♡ 迂回しても……魔力が通るだけで……身体が……っ♡♡♡」

ザインが額に脂汗を浮かべて魔力を制御する。子宮を避けて残滓を探る。だが——

「残滓が、お前の生殖器に集中している」

ナギが目を見開いた。

「……嘘だろ」

「嘘はつかない。死霊術師が所見を偽ってどうする」

（結局、避けられない。この身体はいつも俺を裏切る）

涙が頬を伝った。

「……やれ」

ザインの魔力がカントの奥に侵入した。子宮を包むように、冷たく鋭い魔力が浸透していく。

「おおおっ♡♡♡ 中からっ……♡♡ 子宮、直接……撫でられ……てっ♡♡♡」

ナギの全身が弓なりに反った。前世で鍛えた声優の喉が、 $\Omega$  の嬌声を震わせる。低い倍音と高い裏声が混じり、石造りの管理棟に反響して増幅される。

（自分の声がこんな音を出せることを——知らなかった）

「あっ♡ はっ……んっ♡♡ ザイン……お前の魔力……子宮の壁を……全部……っ♡♡♡」

ザインの歯が軋んだ。ナギの声が—— $\alpha$  の本能を直撃している。声優の技術で無意識に共鳴させた嬌声は、通常の  $\Omega$  より遥かに蠱惑的に脳を揺さぶる。

魔力が残滓を引き剥がしにかかる。だが残滓はナギの発情と絡み合って、引き剥がすたびにナギの快感中枢を刺激した。

「びっ♡♡ あっ♡♡ 剥がされるたびに……っ♡♡ 気持ちいいのが……来るっ♡♡♡」

カントから蜜が溢れる。ザインの魔力に反応して子宮が収縮し、クリトリスが充血する。寝台のシーツに、じわり、と蜜の染みが広がっていく。

「半分引いた。耐えろ」

「む……り……っ♡♡ もう壊れ……っ♡♡ おおあっ♡♡♡ 子宮う……魔力でぐちゅぐちゅされて……っ♡♡♡」

ナギが絶頂した。ザインの魔力に子宮を撫でられただけで、カントが痙攣し、潮が太腿を濡らす。声が——前世の声優の喉が——この世のものとは思えない甘い悲鳴を管理棟に響かせた。

ザインの理性が軋む。αの本能が咆哮している。「番にしろ」「抱け」「孕ませろ」——覚醒して数時間の衝動が全身を灼いている。

だが止められない。残滓を引く途中で中断すれば再び癒着する。

「残りは——卵巣に絡みついている。最も深い場所だ」

「お……っ♡♡ いちばん奥……触って……っ♡♡ いやだ……っ♡でも……触らないと……死ぬんだろ……っ♡♡♡」

ザインが最後の残滓に魔力を集中させた。ナギの子宮の最奥。卵巣に絡みついた最後の一片。

ナギの身体が完全に開いた。カントが大きく開き、中の柔らかい肉が痙攣している。クリトリスが腫れ上がり、些細な刺激で絶頂を繰り返す。

「おっ♡♡ おおおっ♡♡♡ 剥がさ……れ……っ♡♡♡♡」

ザインが最後の残滓を引き剥がした。

ナギが叫んだ。全身が痙攣し、カントから潮が噴き出し、意識が白く飛んだ。

\* \* \*

意識が戻った時、身体は汗と蜜でぐっしょり濡れていた。

ザインが寝台から離れ、壁に背を預けて荒い息をしている。金色の目が、ナギを凝視している。

「残滓は除去した」

掠れた声。ザインの指が震えている。

ナギが安堵しかけた——が、すぐに気づいた。

身体が全く落ち着いていない。むしろ、残滓を除去したことでΩ本来の発情が剥き出しになっている。

「発情が……止まらない……っ♡」

ザインが目を閉じた。

「残滓が発情を引き起こしていたんじゃない。残滓がお前の発情期を前倒しにしたんだ。今のお前は、本来のヒートに入っている。しかも残滓の刺激で通常より遥かに——」

「嘘だろ……っ♡♡」

涙が零れた。偽解決だった。残滓を除去しても、発情は止まらない。

そして——ザインの魔力がナギの体内を通ったことで、ナギの身体がザインを「番の候補」として認識し始めている。ザインの匂いを嗅ぐだけでカントが疼き、子宮が収縮する。

「来る……な……っ♡♡ お前の匂い嗅ぐと……身体が……っ♡♡♡」

自分でそう言ったのに。

手が伸びていた。ザインに向かって。

「やだ……っ♡ 手が……勝手に……っ♡♡ 俺は男なのに……前世では男だったのに……こんな身体が…… $\alpha$ を求めるなんて……っ♡♡♡」

理性と本能が引き裂かれている。手が震えている。涙が止まらない。

ザインが振り返った。金色の目でナギを見た。

「お前の声が好きだ」

ナギの涙が止まった。

「最初に聞いた時から。お前が死者に語りかけるあの声が。お前の $\Omega$ の匂いも、カントも、関係ない。俺が最初に求めたのはお前の声だ」

「ザイ……ン……っ♡♡」



「だが今は——お前のすべてが欲しい。声も、匂いも、この身体も。αの本能なんかじゃない。俺の意志で、お前を離したくない」

ザインが戻ってきた。ナギの頬に手を当てた。α 覚醒で熱を持った指先が、ナギの涙を拭う。

「番にされたら……もう戻れない……」

「戻る場所があるのか」

「……ない」

ザインがナギの唇を塞いだ。

\* \* \*

月光が窓から差し込んでいる。

ザインの舌がナギの口内を蹂躪した。α のフェロモンが唾液と一緒に流し込まれ、ナギの身体が一気に発情の頂点に達する。

「ん……っ♡♡ ぐん……っ♡♡♡」

キスの最中に、カントからどろりと蜜が溢れた。太腿を伝い、シーツに落ちる。

ザインがナギの寝巻きを剥ぐ。華奢な身体が月光に晒される。青白い肌が汗で濡れて光っている。乳首が硬く勃起上がり、下腹部——カントの割れ目がぬるぬると蜜で光っている。  
「やだ……っ♡ 見ないで……っ♡♡ こんなの……男の身体じゃ……っ♡♡♡」